

湯原教授の口講に係る教育學講義の筆記、載せて九州教育雜誌に在り。頃者椎軒學人さいふものあり、敢て疑議を挾みて同誌に一文を寄せぬ。左の一篇は實に之を反駁せられたるもの、讀み來りて益する所甚だ多し。且つ學人の文を見ざるものも、明に論旨の在る處を察し得べきを以て、今請うて之を本欄に收めぬ。

編輯委員 識

豈好辨（其二）

教授 湯原元一

予が教育學講義の、荒尾米原二君の手に筆記せられて、九州教育月報の紙上に出づるや、椎軒學人なる哲學者ありて、長篇の論文を寄せて、予が教育學上より、傍ら哲學上の二三主義につき、批評を試みたるに對して、痛くも駁撃を加へ玉ひぬ。數ならぬ講義も、大方の一顧を辱ふすることを得たるは、予が光榮、何ものうこれにまさることのあるべきや。されども、元來右の筆記は、予自らの手に成りたるにはあらで、前の二君が、任意の共録にしあれば、予が責任は、講義に對してこそ存すれ、講義の筆記は、其の文句にまで、對して存するの道理は、よもこれあるまじ。況して、荒尾米原二君は、教育の經驗こそあれ、哲學の素習ある人とも聞へざるのみか、予が持前の辣辨もて、亂調子に口述せたる、長講義の要を約して、二君、各其の會心の所を記録せられしものなれば、行間の語氣文脈の、自ら貫穿を欠けるは、固より免れがたかりける所にぞ、あるべき。二君も、亦能く之を知れるが故に、そが筆記の序にも、『讀者、冀くば、此一片の筆記に依りて、先生を煩はすことなくば、幸甚』と、ことわけせられたるは、惟ふに、必ずしも、予が不敏を庇護するの意のこにも、あらざるべし。以上の理由によりて、學人が右の筆記の文句を捉へて、直接に、予を相手の、仇敵呼ばはり、予が頗ぶる迷惑を感ずる所、隨ひて、此點に於ては、予は、學人に對して、正面に、一々其の駁論に、答辨するの義務なきものど、思ふなり。

然ら、右の如く、二君の筆記は、精確を欠く事實なれども、予が大體の本旨までも、誤り傳へたるか

といふに、決して、さにはあらざるなり。元來、予が講義の際に、教育學の範圍を超脱して、聊か哲學論に涉りし所以は、チルレルが例に倣ひて、教育の意義を経験的のものと理論的のものとの二者に別ち、理論的の意義を説明するに當りて、理論上、若くは、理論の推斷上、教育の可能の疑はしむる哲學上の意見を、批評するの必要を感じたればなり。されば、若し、これによりて、教育の可能は、經驗上、まろく著明の事實なるにも拘はらず、哲學上、某の二三主義より推論するときば、尙之を疑はざることを得ざるものあることを、知らざることを得ば、予が、茲に哲理論に涉れる目的は、既に達せられたりと謂ふもよし。然るに、學人が論文を通讀するに、學人は、亦并せて、予が此大体の主旨にも、反對の意見を有せらるが如し、されば、此點に於ては、予は、讀者に對しても、學人の非難に對する答辯の義務を免れがたきか。況して、態本なる文壇にて筆戰を挑まれたるは、これが初一度なれば、かたぐ打捨てもおかれまじ。いでや、詮方なしまことの相手は、誰れと定かならねども、兎にも角にも、大哲學者と持囂され玉ふ維軒學人となん呼ぶ御方に、一應の御相手任りて、且、讀者に負へる義務をも果し、且は彼の一知半解の所謂哲學論の、如何に怪しきものなるやをも証明し、學人、並に讀者の參考に、供へ參らすべし。

學人が、劈頭第一の攻撃は、予が精神の三分法に關する、意見に向へり。學人は、予が、精神の三分法は、アリストートルに始まりし如くにいへるをば、親切にも、二箇まで、典據を擧げて、叱正せられたるに、予も殆んど、痛み入らざるを得ず、其の實をいへば、アリストートルは、プラトリーの誤りなり。且この、筆記者の錯誤にあらず、全く予が講義の際に於ける、不注意より生じたる過失なり。今にして憶へば、恰も、孟子と孔子と、取違へたるようにて、赤面の至りに堪へず。さはあれ、學人が、精神の三分法

は前世紀に始まりたるものと、信ぜらるに至りては、予は、其の典據あるにも關せず、容易に首肯すること能はざるなり。請ふ、其の然る所以の証左を示さん。フナルクマンが言に、

プラトンは、現象(精神の)の多種なること、否な、現象の互に相一致すべからざることをより推斷して、現象の負擔者に及ぼし、彼の三部分、則ち理性、憤怒、(勇氣)慾望(下等)の三部分を立てた

り。フナルクマン心理學第一卷二二頁

とあるによりて考ふれば、理性は、今日の所謂智を含み、憤怒は、今日の所謂情を指し、而して欲望は、今日の所謂意に當れば、假令、プラトンの議論は、他に奇怪の點少からずとするも、今日の三分法なるもの、既に彼に胚胎するといふも、予は、毫も不可なきを信ず。されば、現今心理學の泰斗たるウントも、其の生理的心理學に於て、能力説の沿革を叙して、

既にプラトーがチメフェイス(書名)に於て智情意の區別に相當する精神の三分法を見る

ウント生理的心理學第一卷一

四頁

とはいへるなり。かゝれば、學人が議論は、いふまでもなく、學人が典據として、引き出て玉へる、サリ。ヘフチング二氏の説と雖も、未だ一概に、信仰し易からざるなり。況して、二氏がアリストトルが二分法として、思想欲望を擧げたるが如きは、決して、精密に、ア氏の心理説を研究せたるもの、意見とは、見るべからず。こゝ、少しく念の入りたる哲學史を一閲せたるものなほには、容易に明かなるべき點なれども、それに及ばずとも、前に出せる、ウント、さては、例の有名なる、高橋五郎君の典據にさへ、引かれたる、キルヒテルが心理學に據るも、實に明白なる事實なり。

先づ希臘哲學史の著者として名高きチエルレルが説をきくに、

觀察されたるものを善惡上の視點の下に置くときは、快不快生じ、而じて快不快より更に慾望を生ず。此狀態も亦(快不快の如くに)感覺の中心點より發生し來るものなりチエレル希臘哲學史一七八頁とあり。

次にキルヒチルが、アリストートルが De mem. 2.; de au. nvt 6 8 II de an. II. 3.; Eth. nik X. 4. 等に據りて、其の心理説を説明する言には。

植物は、營養を、動物は、其の上に、感覺を、完全の動物は、其の上に、運動を、而して、人間は、又其の上に、理性を有す、云々。感覺は、欲望の所依なり、何んとなれば、感覺のある所には、必ず欲望を將來する所の、快と、不快とあればなりキルヒチル心理學一六頁

とあり。又、次ぎにウントが、ア氏の de Anm. II. 2. 3. によりて、其の説を解釋する言をさくに、實に。

アリストートルによれば、精神は、生活の原力として、解釋せらるゝが故に、彼は、(精神)尤も高尚なる、生活現象の段階に隨ひて、營養、感覺、及び思辨に分かる。ア氏は、時々、尙他の精神力を述ぶると雖も、彼は(ア氏)特に欲望を、感覺に従屬せしめつゝ、前の三者を以て、尤も普通のものとして視做すこと、明かなり。ウント生理學的心理学第一卷十五頁

とはあるなり。されば、三氏の説の如く、アリストートルは、欲望を、感覺に伴隨する、自然の結果として、之を感覺に従屬せしめて、之れが爲めに、特別の位置を割與せざれば、ア氏の二分法は、思想と、欲望とにあらざして、其の實は、思想と、感覺なり。惟ふに、サリー、ヘフチング二氏も、流石に、此微細なる區別までは、注意到らず、適ま、從を主と、伴隨するものを、伴隨せしむるものと、取違へたるものなるべし。よはあれ、希臘古代の哲學は、近年、續々專攻の學者を出し、大に從來の面目を改めつゝある

が上は、井二氏は、哲學史專攻の人とも聞えざれば、かゝる誤謬に陥りしも、深くは、咎むべからざるか。こは、餘事なれども、序ながらに、學人が、春日の神木たる典據呼ばはりも、毎に、具眼の人を屈服するの威靈は、これなきことを、明きらめ、置くのみ。

次ぎは、本尊間違ひの非難なれども、こは慥りに、學人が預想し玉へりし如く、印刷の誤りなりしこと、筆記者か、或は編輯者かよりして出せる、前號の正誤にて明かなれば、更めていふべき廉もなし。

第二に答辨すべきは、予が教育學上より二元論を批評せるに對する、學人の駁論なり。學人は予がいふ所の二元論は極端のものにして、其の典型となすべからずな論じらるれども、こは、予が着眼の點の、何處に存するやを、看破し能はざりしより生じたる迷誤なり。何んとなれば、前にもことわけせし如くに、元來、予が茲に、傍ら哲理論の一方面を觀察する所以の目的は、教育の可能に反對する意見を擧げて、批評を試みるにあれば、苟もかゝる嫌疑を惹くに足るものあれば、固より其の説の温和なるも、過激なるも問ふの必要なし。否。な寧ろ温和にして、曖昧ならんよりは、過激にして鮮明なる旗幟を翻がへすものを求めて、當の仇と名乗りかけ、引き組みしくこそ、予が目的には協ふなれ。且學人は、一面には、『好し、實際にこれに類する學說ありとするも』、なといひながら、他面には、『予輩の淺學なる、未だかゝる二元論のありや、なしやを知らず』と、いはるゝを見れば、學人は、予がいふ如き二元論の、哲學史上に存するや、否やを疑ひ玉ふが如し。さりとは、近頃哲學者たる、學人にも似合ひなき申分にあらすや。學人、若し予が言を、道理なきものと思ひ玉は、請ふ、左に其の大意を抄録する、ギレンシキス、マレブランシユ、二氏が、デカルトを敷衍せる意見につき、一考せられよ。

精神も、直接に、身體の上に影響すること能はず。何んとなれば、吾人は、任意に身體を動かす

之を得るも、該運動は、果して、如何にして出来るやを、知ること能はざれば、吾人を以て、直に該運動の原因なりと、認むることを得ざればなり。之と同じく、**身体も、亦直接には、精神の上に影響すること能はず。**何んとなれば、例へば、視覚によりて、吾人の眼、又は腦に生ずる印象は、元來、物質的のものなれば、該印象が、物質的なる身体と、全く其の性質を異にする、精神の中に入り得べしとは、毫も信すべからざればなり。然り而して、二者の間に、相互の關係の存するは、全く神のその間に立ち、これが媒介をなし玉ふによるなり。

是れ**ギョレンキス**が、二元論の大意なり。マレブランシユの意見に至りては、更に一步を進めたれども、其の大体は、**ギョレンキス**に似たれば、更めていはず。茲には、唯彼が議論の神髓とも眼目とも見るべき最緊要の一言を添へをらん。

神は、我と外界との、高等なる中間物なり。吾人ハ、神と親密に結合するが故に、吾人は、神に於て諸ろの觀念を見、隨ひて、吾人は、神を精神の居所といふことを得。

此外、之に類する二元論の引証に供すべきハ、**二氏**の後にも哲學史上、尙其の例に乏まらさず。惟ふに、學人も、最早此に至りては、予が説きたるが如き二元論は、予が腦中の傀儡にあらさず、若し傀儡なりとすれば、**ギョレンキス**、**マレブランシユ**、**エニ**氏等が、腦中の傀儡なりしとを認め玉ふならん。若し、かくても、尙予が言を、信せられずとあらば、請ふ、**シユウエグレル**が哲學史、二二六頁より二二七頁、**キルヒチ**ルが哲學史、二七三頁より二七四頁、**エルドマン**が哲學史、第二卷二六頁及び三七頁、並に**ユベルウエヒ**、**ハインチエ**が哲學史、第三卷七七頁より八七頁等を參看せられよ。是等の書籍、萬一御持合せなくんば、御得意の**ユベルウエヒ**が、舊本の英譯哲學史、第二卷五四頁にても、粗略の記載ながら、大意を窺

ふには、その事足りなんかとも存す。

予は、これより進みて、學人が予を非難せんとあせり玉ふの餘りに、予を目して、古人の説を曲解するものなりなど、罵らるゝに拘はらず、學人自からは、如何に得手勝手の議論をなし玉ふやを示さん。」學人は、「近世二元論をいふものは、必ずデカルトを説く」といひ、且予が講義の筆記には、曾て其の名さへ、指示せあらざるにも關せず、デカルトが、議論の講釋などせらるゝを見れば、學人は、二元論の受持は、デカルトに限るとまでは、信せられずとするも、少くも、二元論に關する問題には、デカルトの顔出しを必要なるものと、心得居らるゝが如し。然れども、二元論は、遠く希臘のバイサゴラス(恐らくは、印度の古代)に始まり、デカルトに中興し、近世に至りては、クラウス、ケウンテル、ウルリチー諸氏に唱道せらる。されば、此方面の専門家は、その變遷の歴史を區別して、希臘。デカルト。近世の三期時となし、之れが講究の、便利を計れるほどなり。加之ならず、所謂デカルト期の二元論も、其の開祖は、デカルトにあらずして、マルブルグ派の學者なるは、近代の研究にて、明かなりしこと、恐らくは、學人も、哲學史、又は先坐の講義によりて、夙に聞き知り玉ふ所ならん。かくの如くに、幾千年來、數多の學者によりて、唱へられたる二元論につき、予が批評を加へたるを見て、直にそが一人なる、デカルトに反對するものと、早合點せらるゝは、荅州君などに、大哲學者と崇がめられ玉ふ、學人の舉動とては、如何にも、輕卒にはあらざるか。加之ならず、予が謹んで、學人の御議論を拜讀するに當りて、覺へず失笑抱腹えたるは、學人が、ユーベルウエヒが哲學史中より、自家の立説に都合よき所のみを、抜き取りながら、例の典據呼ばはりせらるゝことにぞある。學人は、デカルトが、精神と身体とは、松子腺に於て、相交渉す云々の文句を、引き出で玉へども、其の前後には、ユーベルウエヒは、之に對し

て、如何なる批評をなしたるか、彼は、

唯歴すことゝ、衝くことゝによりてのみ、形体ハ動らざる、云々（以上は英譯になし、今ユベルウエヒが原書に據りて重譯す。舊版に比すれば、大同小異なり。）此間、學人が典據としての、文句あり。デカルトハ、身

體と精神とを、全く異種の本体の二元を成すものと視做すが故に、彼が主張する、精神と身体との

交渉ハ、假令、彼が理論に於ては神の助勢の假定によりて、支持せらるるも不可考的なり。ベル

クニヒ哲學史英
譯第二卷四二頁

どハ、いへるなり。これによりて考ふれば、學人は、予を博識なる湯原など、冷うし玉へども、其の實ハ、予を以て、未だ一部のユールウエヒさへも、閱讀せたることなきものと、侮り、擲論一番せんと、試み玉ひしには、あらざるか。假令に、一步を譲りて、學人が本旨ハ、デカルトが意見は、予がいふ如き、極端なるものにあらざることを、証明するにありたれば、ユールウエヒ輩の批評などには、頓着するの違なかりしものとするも、然れども、若し、デカルトが、茲に精神と、身体との交渉を説くの意見ハ、到底彼が二元論より、推理すべからざる性質を有すること、眞にユールウエヒの説の如くならんには、學人が折角に引られたる典據も、其立説に取りては、毫末も効益なき、道理にあらざるや、然らば、ユ氏の説の如きは、實に學人の爲めには、當路の豺狼とやいふべからん。學人たるもの、眞にデカルトか意見を、よし其一部にもせよ、予が批評に對して、回護せんと志あらば、此當路の豺狼たる、ユ氏の説を、全く知らぬ顔に、見遁して可ならんや。

さて前にもいふが如くに、予が二元論の批評は、必しもデカルト一人を相手としたる次第にハあらざるなり。よしデカルト一人を相手とせたりとするも、予が議論の主旨は、假令其一小部分たりども、取

消すには及ばざるなり。これは略ぼ前項の議論にて其本意ハ窺はれることなれども、尙或ハ誤解の生ぜんことを恐るれば、更に端を改めて、學人の議論は、デカルトを一知半解きたるものにして、彼が二元論より、心身相關を説くは、所謂誤謬の前提より、正當の結論を偶中し得たるものなることを証し、而して、其の正當の推理に於ては、彼は全く心身相關の事實に反對して、教育の可能を否拒するものなることを詳論せん。請ふ先づ、デカルトが精神と身体に關する、一般の意見をきかん。デ氏は、其著書『哲學原理の觀察』*Meditationes de prima philosophia* 第六章に於て、先づ吾人が、明亮に互に相異れるものとして、知識するものは、亦其の實際に於ても、互に相異なるものとして、存在することを説きたる後、實に左の如き語をなせり。

一方には、予は、予自らにつき、予ハ全く思辨すれども、廣袤なき本体なることの、明白なる觀念を有す。他方に於ては、又予は、予が身体は、全く廣袤を有するも、思辨せざる本体なるとの、明白なる觀念を有す。此故に、予は、眞に身体より異にして、身体なきも、尙存在し得ることは、確實なり。

○獨譯デカルト哲學原理の觀察、九五頁、

氏は、尙此前後に於て、身体も、亦同しく、精神なしと雖も、獨立に存在し能ふことを説けども、前文にて、其の意見の一斑は、窺はるれば、今は煩を厭ひつ、これにて割愛す。

右の如く、デカルトによれば、精神と身体とは、各自互の扶助を待つことなきも、尙存在し得る本体にして、二者の性質は、一つの共通の點なきは勿論、實に互に相打消し且互に相反對するものなり。然らば、かくまでも互に相反對する二箇の本体ヲ、如何にして相結合し得るやは、苟も常識あるものハ腦裏には、必ず先づ浮び來らざるを得ざる問題なるべし、若し果して、この二者にして、能く相結合する

ことを得ば、是れを正しく、水と火とか、其の固有の性質を失ふことなしに相結合し、否な、シユウエグレルかいへりしか如く、遠心力と引心力とが相合して、同一の方向に對して、共同の働きをなすの時なり。されば、デカルトも、右の『哲學原理の觀察』に於てこそ、事もなげに、二者の結合は、容易に出來得べきものゝ如くに説げども、ガッサンチー等が反對に出逢ひしよりは、流石に當人も、此問題の解釋には、頗る困却を極めたる体見ゆるなり、エルドマンが、

彼は、(デカルト) 本体の性質は、互に相容れざるが故に、思辨と廣袤とは、火と水と、黒と白との如きか故に、かゝる結合(心身の結合)の存在することを、自白するをば、痛く困難に覺へしと雖も、又彼は、其の他かゝる結合の存在することを証明し能ふは、理性にあらざして、却りて、唯覺官、並に經驗なることを繰返し主張せしと雖も、假令混合(Compositio)にもせよ、思辨する本体(精神)と、身体と相合併して、一箇体を形造することを、否拒すること能はざりき。エルドマン哲學史第二卷二二頁

といひしは、能くもデカルトが意中を、見抜きたるように覺ゆ。然るに、かくの如くに、困却を極めたるにも拘はらず、彼が唯心身相關の事實を否拒せざるのミならず、却りて、其の交渉の場所までも、論定せたるは、抑も如何ぞや。手は學人と共に、デカルトに此説あるの故のミを以て直に彼か二元論は、心身相關の事實と、相兩立し得べきものと、信せざるべからざるか。何んぞ、それ然らん。請ふ且らく、彼が所謂心身相關論の詳をさかん、

この結合あるに拘はらず、精神は、實際身体を動かす能はず、何となれば、假令、少しにても、運動の外より増加することは、自然法の第一則各物体は其の存する状態に止まるを顛覆すればなり、然れども、精神は、松子線上の上に及ばず影響によりて、(身体内に)運動せつゝある活力 *Spiritus animalis* に、其の方

向を指圖することを得るか故に、其の働きは、恰も騎者が(間接に)馬自からの運動を指導するが如し。之と同じく、覺官、及び他の精神の器官の刺戟も、元來は一つも新觀念を與ふるものにあらずして、却りて活力の運動と、及び以前の運動か腦中に殘しおける跟跡こそ、精神の爲めに、此等のもの(新觀念)を喚起するの誘因と、機會とを授くるものなり。エルドマン哲學史第二卷二五頁

これによりて見れば、デカルトが所謂心身の相關なるものは、直接のものにあらずして、間接のものなり、運動を起すも、觀念を生ずるも、孰れも、活力なるものありて、之れが媒介をなすにあざれば、出來ざるものなり。されば、本文にも見ゆるが如くに、吾人が任意の運動彼の有機的不任意の運動のみにあらず、身體を御するハ、恰も馬を御するに譬ふべく、デカルトは、實に身體をば、他の動物と同じく自動器械とみなす、馬の馳騁ハ、馬自からの馳騁なるが如くに、身體の運動は、身体自からの運動にして、吾人は唯間接に之れが方向を指導するに過ぎざるなり。果して、かくの如くならんには、吾人々間が其の本体ともおがみつる、精神なるものハ、身體に對して有する勢力は、その實際につきて見れば、如何にも、憐れはうなきものにぞあるなり。然り、予は更に一步を進めん。デカルトハ、觀念を自製せるもの、(factae)借用せるもの、(adventitiae)及び遺傳せるもの、(Inatae)の三者に別てりしが、今彼が此三者の發生に關して説く所、如何をきくに、覺官の刺戟によりては、唯覺官的のものに、關するものトミぞ、喚起せらる。何んとすれば、智力的のものトハ、腦印象(感覺)も、腦痕跡(記憶)も、毫も相關する所なければなり。エルドマン哲學史第二卷第二五頁

因に云ふ、エルドマンが哲學史の精嚴該博なることハ、世既に定論あり。前に引き出てたる、三節の原文には、一々デカルトが某の書簡又某の遺著に據るよしを註しあれば、特に信を置くに足るべし。實は、予も典據ハ、可成デカルトの原著より取らんことを望みたれども、目下我邦にて、

彼が零簡斷篇までも手に入るゝとは、到底その望まなければ、且らく右のエルドマンに従ふとせり。但し彼が主要著書なる Principia philosophiae 及び Meditations de prima philosophia の獨譯二種の、予が文庫中の藏なれば、エルドマンが之に據る所丈は、念の爲め引合せ見たれども、一も疑はしき點を見當らざりしことを、殆んど其の必要もなければ、茲に一言保証したく。との語あり。さすれば、デカルトが間接ながらも、外來の刺戟にて、新觀念は、生するものといひたるも、其の實は、總ての觀念にあらずして、僅かに覺官的、則ち五官にて察知すべきものに限り、而して、彼の尤も高等なる、智力的の觀念は、今日は、精神生活唯一の源泉とさへいふ人あるは、その、感覺記憶など、一つも相關係する所なきものと、知られたり。かくの如く、漸次順序を追ふて研究し來れば、デカルトが、所謂心身相關論も、彼が如何に親密にありとふに、説き立つるに拘はらず、其の眞底に於ては、之を身体の方よりいふも、又之を精神の方よりいふも、孰れにしても、其の双方の極端の所には、依然として相衝撥して、曾て互に相調和するの望みなき所のものありて存するは、斷々乎として、疑ふべからざるなり。デカルトも、亦自から之を知るが故に、前にいひし如く、此問題に關する理性の証明を斷念したるのみならず、彼は終に、ハインチエがいふが如くに、

精神の身体の上への影響、並に身体の精神の上への影響は神の扶助 (Concursus, or. assistentia Dei)

あるにあらざれば、不可なり。ユールベルウエロハインチエ
哲學史第三卷七五頁

とハ、自白せるなり。説きてこゝに至れば、讀者、及び學人ハ、彼の偶々哲學史の一章中より、デカルトが、心身ハ松子腺に於て、相交渉すといへる一句にて論ずるにも足らず。此事實の非なることは擧はかりを拾ひ得て、デ氏が二元論は、かくの如しなど斷言するもの、擧動の何如に、片腹痛きものなるやを、感悟し玉へりしならん。

予は、今此第一回を終るに臨みて、尙も予が意見の、讀者、就中、尤も予に對えて、反情を有し玉へる、學人にも信用せられんことを希望しつゝ、左に哲學者として、讀書社會に令譽ある諸氏が、デカルトが二元論は、決して、心身相關の事實と、相容るゝと能はざるものと斷言せる、意見の二三を抄録す、先づシユウエグレルは、デカルトが哲學の第二の欠點として、

彼は、二箇を互に相容れず、互に打消す本体、詳言すれば、勢力と定めぬ。彼に取りては、物質の本体は、廣袤、詳言すれば、唯純然たる外在に、而して精神の本体は、思辨、詳言すれば、唯純然たる内在に存す。二者は、遠心的のものと、引心的のものと、如くに、互に相反對す。此見解に従へば、精神と身体とにつきては、兩者の親密なる結合は、一つの不可能なり。若し、此二つの側面が、人間の如きものに於て、相遭遇し、相結合することあらば、これ唯造化の無理押付によりて、神の扶助によりてのみ、出來能ふのみ。シユウエグレル哲學史二三五頁

といへり。是れ、其の著書の英譯もあり、且其の叙述の平易明快なるを以て、我邦人に歡迎せられたる、シユウエグレルが語なり。次ぎには、フナルクマンが説をきかん。

デカルトが、精神と、身体との間に、畫せる溝渠は、箇々の精神的働きを身体に附與しても、又二者の間に、上下に波動する、活力を引入れて考へても、最早、理立は出來ぬなり。精神は、松子腺が企つる、いろ／＼なる運動丈の、いろ／＼の觀念を含有するてふ、証據立ては、全く無實空虛の証據立てにどゞなる。されば、唯一の道路は、神てふ觀念の上への望見の、これを開くあるのみ。

フナルクマン心理學

第二卷一四二頁

これ、現今歐洲第一流の心理學者として、又其の著書は、尤も歴史的觀察に富むたるを以て、名高き

フチルクマンが語なり。次きには、フヰツセルが説を擧げん。

この事は、(精神ハ、身体と相同しからざることを)思辨と廣袤とが、實際に、全く互に引分けられ得るといふ謬見に基くものなり。デカルトは、二者を、全く反對のものとして取扱へども、若し此事にして、正當ならんには、身体と精神の一致は、唯理會すべからざるのみならず、二者は、適に互に相反抗するものなり。然るに、心身相關の事實は、デカルトに少からぬ、當惑を感せしめたりと見へ、彼はさまざまなる比較をなし、假定をなして、此當惑を打越へんとすれども、終に其の效果なし。デカルト哲學原理の觀察獨譯九五頁

是れ、デカルトが哲學の第一義なる(Cogito ergo sum)につきて、特別の著書もあり、總して尤もデカルトに沈潜せる、フヰツセルか、其の獨譯『哲學原理の觀察』の欄外に於て、デカルトが、極端なる二元論を唱へながら、并せて心身の一致結合を説明せんと企つるをば、非難せる語なり。

以上、三氏の言は、孰れもデカルトか哲學の批評に於ては、其の典據として、信を取るに十分の價直あれば、これにて、予が前顯の目的を達するには、その事、既に足れりとは思へども、元來、學人は、予は多少の哲學的趣を解し得るものなりや、否やさへ、疑へる方のごとて、尙或は、予か説く所を、信すること欲せられずとも、計り難ければ、改めて、例の御得意の、ユベルウエヒが哲學史に、同一の事につき、下しある評語をも加へをかん。

デカルトは、身体より精神へ、並に精神より身体へ及ばず、自然の影響(Influxus physicus)の可能を、ガッサンデーに對して、主張すと雖も、心身二者の絶對的不同より、推し詰むるときは、かゝるもの存を得べきは、考ふるに由なし。されば之を説明するの理由と見るべきは唯神の干涉を餘す

のみユベルウエヒ、ハインチエ
哲學史第三卷七九頁

右は確かに、ハインチエ修補の最新版に據りて、譯出したれども、或は又も、人形違ひなどの御嫌疑を蒙らんことの恐ろしければ、尙念の爲め、御手元なる英譯第二卷五四頁の、第三節五行目當りより以下を御引合ありたし。

此他例のキルヒチルは、いふまでもなし、就中、ウヰンデルバンド哲學史の三二六以下には、此に關して、尤も詳細なる議論あれども、餘りにわかり切つたることを、餘りくどくしく説明するも、益なき業なれば、典據の引証は、これに止めて、以上の陳述にて証明せられたる、デカルトに關する、予と、議論の要旨を約言せん、大略左の如し。

一、デカルトは、精神と身体とを、互に相反對する本体となし、極端なる二元論を唱へしこと。

一、デカルトは、自からも、此二元論より、心身相關の事實を説くことの困難を、感々居れること。

一、デカルトは、心身相結合えて、統一をなすなぞいふに拘はらず、尙其の議論の眞底には、心身の二者に、到底互に結合し能はざる所あることを、承認せること。

一、デカルトは、自家の持論よりは、心身相關の事實を説明し能はざりしが故に、彼が極端なる二元論は、依然として、極端なる二元論なること。

一、予が知れる哲學者は、悉くデカルトが二元論は、本人が如何に辯解するに拘はらず、心身相關の事實と、相兩立し難きことを、是認すること。

借問す、學人は、尙此極端なる二元論をば、教育の可能に反對するものならずと、回護するの勇氣あるや。かくても、御異存あらば、請ふ更にデカルト、又はデカルトに關する確かなる典據を引きもて來り

玉へが。之。例。の。得。手。勝。手。摘。み。取。り。の。御。技。倆。は。打。見。に。は。尤。も。ら。し。く。覺。ゆ。る。が。故。に。學。人。自。か。ら。の。御。見。解。通。り。獨。り。忠。實。な。る。讀。者。を。賊。ふ。の。み。な。ら。ず。そ。れ。に。對。す。る。答。辯。も。右。の。如。く。に。僅。う。に。一。二。句。を。反。証。す。る。爲。め。に。數。千。言。を。重。ぬ。る。の。煩。ひ。あ。り。て。可。惜。時。間。を。徒。費。す。る。の。恐。れ。あ。れ。ば。以。後。は。眞。平。御。免。を。蒙。り。た。し。

さてこれより第三の問題に移り行き、予は、學人がカントが自由意志論に關する、予の批評につき、加へ玉へる、罵詈訥非難に答辯し、日本の片隅に、無法の謬説を傳へて、嚴格なるキニクスブルヒの碩學に、地下に冷笑せらるゝものは、予にあらずして、椎軒學人となん呼べる。サリー、ヘフヤンク、エベルウエヒ、ワーレスと、精粗はいはず、確かに一閱したることある、(?)所謂大哲學なることを、證據立てん。

(未完)

漢 人 種

藤村守美

謹啓日々御面會は致すもの、雜誌面にての御交際は是か始めてに御座候以後御厚誼之程宜しく奉祈候然れば小生の此問題に注意し始めたるは既に久しき前よりの事に候得共今回の勝利と及び此勝利に對する日本人の言論舉動は思はずも小生をして一種異様の感慨を促し候されど畢意懶にして物事甚だチツコウなれば其儘に打ち棄て置候處此度編輯委員に奨励せられふと思ひ立ち倉卒稿を起し候其故字句文体醜を極め前後矛盾の點も多く言語穩かならざる所も少からず存候然れども諸君にして善く熟讀の勞を吝まらなくんば或ハ言外に意味の存するや計られず候且つ今度最も趣味ある最も價値ある文明上貿易上財政上外交上の疑問を省きしは甚だ遺憾に存す候へ共是も時日の許さざる所致方無之候聊か挨拶申述へ以て序文に代ふるこゝ、致し候恐惶謹言

讀者諸君

守 美